

医学教育研究の温故知新

柴田幸雄

最近 Opening Pandora's Box (G. Nigal 一九八四) を読み、社会学者のみた生化学研究に対する批判とはいえ的をえたところがあると考え、ここに研究教育における展望を行ったので報告する。昨年はニュートンのプリンキピア出版三百年にあたっていた。先に本学会でものべてきたが(日本医史学雑誌、一九七八、一九八二)、私の属する日本生化学会においては最近眼をみはる発達があるのに比べ、医学部における教育研究のあり方を考える時、一沫の不安を感じずにはおれない。生理学から生理化学として Hoppe Seyler が分化させたのは一八七七年、当時 Salkowsky はその巻頭に動物体内における尿素形成についてのべている。何といっても医化学の中心課題は、血液・尿の化学的組成の変化と栄養にあることはいうまでもないことである。当時は研究方法にてもきわめて古典的であり、ハー

ヴェーの血液循環の理論やクロードベルナールの実験医学序説をみてもそのことがよくわかる。又佐多愛彦先生の論文集(昭・十五)や古武弥四郎先生の論文集(昭・四、昭・十二、昭・十五)からもこのことがしられる。さらに大阪大学、和歌山県立医科大学の論文集をみると、時の経つのに従い、研究が微にいり細をうがって行くことは一目瞭然である。(市原硬、昭・三十五)、(古武弥人、昭・三十四、昭・五十八)、(松村勇一、昭・五十九) Pandora's Box の本にでてくる oxidative phosphorylation (酸化的リン酸化) にいたっては、その研究面における進展は最たるものといえるであろう。ただし、著者ものべている如く、細かく細分化した細胞内諸成分から再びそれを組みたてて、生体として考えていくためにはさらに多くの実験が必要であり、又実際行っていくかねばなるまい。さてこれと同様なことは教育の面でも考えられる。理科の様にすべてが関係のある科目では選択そのものはおかしく、その選択が高校理科でなされていることに問題がある。そして大学進学課程(一般教育)における教育がこれに関連して問題化してくるのである。一九八三年、全国医学部長病院長会議で

出された日本の医学教育に関する白書でものべられているが、いかなるものといかなる人が教育するかはきわめて重要な問題である。戦後日本の教育における問題点がここに山積していると思われる。たとえば生物学・化学と専門課程における生化学との関連だが、近著のイギリスの (Biochemical Education Vol. No. 4 1987) の誌上にも Biology を基礎としてやるべきだが、modern Biology を先にもってくることは疑問であるとのべている。しかし、とかく進学課程の生物学は分子生物学にはしり、化学は現代化学にはしてしまふ。そして学生は勉学に対する不消化がおこり、大量留年をひきおこすこととなる。昭和三十年の看護教育の教科書をみると、化学・生化学を医学部の生化学の人が書いており、栄養学・食事療法への橋わたしと成っている。(考え方によれば古典化学といわれるかもしれない) が、これに比べ現在の看護教育の教科書をみると、生物学が場所によっては生化学よりもくわしくなっている。しかも、この生物学の本には基礎となるべき分類学や比較解剖学が省かれている(寄生虫などで、その動物の所属する動物門がわからないという結果が生まれてくる)。戦後医学

の教育改革で臓器別というコトバが多く出てきて、実際色々試みられてはいるが、基本の知識のないものに臓器別をやっても所詮、学生の不消化が増すだけと思える。この点、医化学が研究面での問題から理・工・農・薬へとひろがり、日本医学会の分科会であることがとかく忘れられ勝ちな日本生化学会であり、その進展は大いに是とすべきではあるが、もう一度原点にたちかえり、医化学としての生化学が考えなおされるべき時にきた様に思う。しかしこれはあくまで退行性ではなく進心性飛躍であるべきであり、この点、理学部出身の研究者も、各自の専門を生かした診断学の将来へ貢献してほしいものと思う。

参考文献

- (一) From medical chemistry to biochemistry Cambridge University Press (1982)
- (二) Harper: Review of physiological chemistry 17 edition (1979)
- (三) Harper's review of biochemistry 18 edition (1981)
- (四) Opening Pandora's Box a special a sociological analysis of scientific discourse G. Nigel Gilbert and Michael Mulkey Cambridge University Press (1984)

初期医学教育における パストウールの意義

大村敏郎

一八八八年十一月十四日、パストゥール研究所が開設された。当初この施設は狂犬病の予防治療所であり、感染症の研究センターであり、微生物学の教育センターであった。この研究所はその後多数の優れた業績をあげつづけ、最近では AIDS の研究でも名声を博するなど世界の第一線を維持している。

百年目に当るこの機会にルイ・パストゥール (Louis Pasteur, 1822—95) のことをふり返り、医学生教育における彼の意義について考えてみたい。

私は昨年、二つの大学で講義の際にパストゥールに関するところで新しい試みを行った。

「医史学」として講義する慶応義塾大学では三年生が対象で、十三時間あり選択科目である。パストゥールとコッ